令和６年度　新たな神戸の防災教育推進事業　実践研究園　　神戸市立灘すずかけ幼稚園

聞こう　考えよう　動こう　つなげよう

～一人一人の防災意識を高めるための防災教育を考える～

＜設定理由＞

年度当初の避難訓練で、昨年経験している５歳児が、災害によって身を守る方法が違うことを理解し、行動できていないことが分かった。
災害の種類による、身を守る方法の違いを知り、放送や教師の話を聞いて、自ら考え、その場に応じた行動ができるようになってほしい。

阪神・淡路大震災を経験していない職員や震災時に働いていた職員は少ない。改めて、震災や防災について学び、幼児の実態を踏まえ「幼児が命を守るために必要な力や経験は何か」を考えることが必要であると考えた。
職員一人一人が、防災に関する知識を深め、防災意識を高めたい。

保護者のアンケート結果から阪神・淡路大震災や東日本大震災などの震災を経験していない人や、家族で災害時についての話し合いや避難リュック等の準備をしていない家庭が多いことが分かった。
子供たちだけで命を守ることには限界がある。家庭や地域と一緒に防災について考えていきたい。

（１）防災に関心をもち、自分で考え、自ら行動できる幼児を育む

（２）職員の防災意識の向上を図る

（３）保護者と共に防災教育を学ぶ
（４）地域との連携を図る

年間計画

日程・内容	ねらい	日程・内容	ねらい
５月　火災（設定保育）	慌てず、教師の指示を聞いて避難しようとする	１０月　地震（好きな遊び）	緊急地震速報の音を知り、その場に応じた行動を考え自分の身を守ろうとする
６月　地震（引き取り訓練）	地震の怖さや命の大切さを知る　自分の身を守る行動を知る	１０月　親子防災体験 DAY②	保護者と災害時の体験をしたり、避難リュックの中身を考えたりして、防災意識を高める
６月　地震（好きな遊び）	近くにいる教師の指示を聞き、落ち着いて身を守ろうとする	１１月　地震（園長不在）	職員間で連携をとって幼児を安全に避難させる
７月　河川増水	川の怖さを知り、川から避難する方法を知る	１１月　地震（水平避難）	２次避難することを知り、避難場所まで周囲の安全に気を付けて避難しようとする
７月　親子防災体験 DAY①	親子で避難グッズを作ったり、試したりして防災意識を高める	１１月　地震（余震あり）	災害時の合図や避難時の約束を振り返り、自分たちで考えて安全に避難しようとする
９月　洪水浸水（西郷小合同）	洪水時は高いところに避難することを知り、素早く安全に行動する	１２月　火災	放送をよく聞き、地震から火災が発生した場合の避難の仕方を知り、自分たちで考えて行動しようとする
９月　園外保育（兵庫県立広域防災センター）	防災に関するいろいろな体験を通して、防災について興味や関心をもつ	１月　地震（地域防災訓練）	地震の怖さや命の大切さを知り、命を大切にしようとしたり、自分たちにできることを考えたりする

実体験を通して！
「聞く」「聞いて考える」「考えて動く」が大切！

（１）防災に関心をもち、自分で考え、自ら行動できる幼児を育む

河川避難訓練

都賀川に行って、川の様子や掲示物、回転灯を実際に見ることで、さらに理解が深まる。

黒い雲が山に近付いています

高いところに逃げるんだね

今日の都賀川、水が多かったよ。近付いたらダメだね

地震避難訓練

地震です！地震です！

先生がいなくても大丈夫！

頭を守らないと！

津波がきます！

風の郷公園に避難

津波の避難場所になっているね！

兵庫県立広域防災センターへの園外保育

煙避難体験

煙で前が見えない！

地震体験

こんなに揺れるんだ！立てないよ

震度4～6を体験

二次避難の大切さが分かった。

防災スキップ

地震のときは頭を守る！

避難リュックの中身紹介

幼稚園の避難リュックには何が入っているのかな？

ライトは、どんな時に使うのかな？

一押しの避難グッズは？

新聞紙で作ったお皿だよ

私はライト、これなら電気がなくても大丈夫

僕は、困った時のおまもりを持ってきたよ。どこに避難するか、書いてあるよ

年間を通して、親子で一緒に防災意識を高めてきたことで、各家庭が防災グッズについて考えたことを幼児が自信をもって紹介したり、みんなで用途を話し合ったりしていた。

（３）保護者と共に防災教育を学ぶ

引き取り避難訓練

（保護者より）

知識では災害対策をしないといけないと分かっているけれど、いざ行動に移すのは…

避難リュックを持参して来ました

職場から迎えに行くという想定をしながら、参加しました

地震を想定して、危険のない道を通ってきました

事前に教師が引き取り訓練の意図を発信したことで、保護者も災害時を想定して訓練に参加した。

親子防災体験 DAY（年2回）

新聞紙スリッパを作ろう！

新聞紙スリッパを履くと痛くない！

もしも･･･の時に、助け合ったり情報を共有したりすることができるように、同じ小学校区域ごとに分かれて体験をする。

災害体験スタンプラリー

担架運び体験

水運び体験

大声体験

心肺蘇生体験

防災リュックの中身を考えよう

水、懐中電灯、タオルもいるよね？

保存食の試食をしよう！

美味しくて食べやすい！家の保存食に購入しよう！

どれも必要で、選べない…

舩木先生の講話

実体験をすることでより防災に意識が向き、家庭でも話すきっかけになり、防災対策をしようと思った

（４）地域との連携を図る

・近隣の小学校と合同で避難訓練をする
・地域の避難訓練に参加する
・職員が地域の防災福祉コミュニティの会に参加

職員が、積極的に地域とのつながりを意識し、関係性を築いていくことが、災害時に地域との情報共有や助け合いにつながる。

（２）職員の防災意識の向上を図る

舩木教授との園内研修
防災教育講話への参加
人と防災未来センターへの見学
AED 研修

避難場所の見直し

避難コンテナの見直し

避難コンテナの中身
保存食・水・避難リュック・防災頭巾・避難場所カード
毛布・アルミシート・小型拡声器・避難時チェックリスト

＜実践の成果＞

○突然の避難訓練でも、情報を取り入れ、自分なりに考えて動く幼児が増えた。
○避難訓練や親子防災体験DAYなどを通して、災害に対して怖がるだけでなく、日頃から備えていれば大丈夫だと思えるようになった。
○職員が、震災について学び、自分事として捉え避難リュックを準備したり、学んだことを家族に話したりするなど、一人一人の防災意識が高まった。
○防災に対する保護者の意識や行動が変わった。

＜実践の課題＞

●引き続き、幼児が周りの状況を理解し、情報を収集してその場に応じた行動をとることができるように、幼児の実態に応じた援助を考えていく。
●職員が、継続して最新の情報をキャッチし、学んだことを広めていくことが大切である。
●今後も、保護者の関心が高まるよう啓発したり、ともに考える場をつくったりする。
●幼児の命を守っていくためには、家庭や地域とのつながりが不可欠である。幼児が地域に親しみや安心感がもてるよう、保護者や地域の方と幼稚園がつながり、交流の輪を広げていく。

令和6年度 新たな神戸の防災教育推進事業　　神戸市立成徳小学校

「いつも心にともしびを!地域と取り組む防災教育　～ともに～」

実践のねらい

本校は阪神淡路大震災の被害が大きかった地域であり、その復興に携わった方も多く残る地域である。阪神・淡路大震災の被災経験者や地域の防災に取り組む方々との関わりを通して、当時の被害の様子や身近な防災対策について知り、防災には普段からの備えや地域の協力が必要であることに気付き、災害に対して自分たちにできることを考えるとともに災害時に地域の一員として役立とうという気持ちをもって行動できるようにする。

避難訓練・引き渡し訓練

様々な事態を想定した避難訓練を実施した。

①地震を想定した避難訓練の後、保護者に児童を引き渡す訓練
②火災を想定した避難訓練
③浸水害を想定した避難訓練
④シェイクアウト訓練及び避難訓練

4 年生の総合的な学習 「成徳防災プロジェクト」

1学期「見つめよう 阪神・淡路大震災」

阪神・淡路大震災について、資料で調べたり、地域の方の話を聞いたりして調べた。

2学期「いかそう!未来へつなぐ防災プロジェクト」

防災のために自分たちができることについて調べた。仙台市の学校との交流やプラスアーツ(NPO 法人)の「イザ!カエルキャラバン」を体験した。

3学期「広げよう防災!成徳キャラバン隊」

自分たちができる「楽しく防災を学ぶ方法」を考え、「成徳カエルキャラバン」など子供たち主催の防災活動を行った。

1 月の土曜参観「防災学習デー」

【各学年の取組と協力機関】

1年生「車両見学」(灘消防署)・防災ダックカード・防災カルタ

消防署の方に、緊急車両や消防士の装備品などを見せていただいた。
教室では、防災ダックカードや防災カルタを活用した防災学習を行った。

2年生「担架体験」(灘消防署)・避難リュックづくり

消防署の方に、災害時に使える簡易担架の作り方を教わり、運ぶ体験をした。
教室では、避難リュックの中に必要なものを考える防災学習を行った。

3年生「バケツリレー」(保護者〈父親会〉)・紙スリッパづくり

父親会を中心とした保護者と一緒にバケツリレーを行った。
教室では、災害時に使用できる紙スリッパなどをつくる防災学習を行った。

4年生「ポリ袋でポンチョ作り」(成徳防災福祉コミュニティ)・安全マップ作成

防災福祉コミュニティの方に、災害時に使えるポリ袋で作るポンチョの作り方を教えていただいた。
教室では、地域の安全マップを作成する防災学習を行った。

5年生「心肺蘇生法・AED 使用法訓練」(消防団)・正確な情報を早く知るために

消防団の方に、緊急時の心肺蘇生法や AED の使い方を教えていただいた。
教室では、災害時の情報収集方法について考える防災学習を行った。

6年生「避難所設営訓練」(灘区役所)・一日前プロジェクト

区役所の方に、体育館での避難所区画テントの作り方や災害用トイレの設営の仕方を教えていただいた。
教室では、「一日前プロジェクト」として、明日、災害が起きるとすると何ができるのかについて考える防災学習を行った。

阪神・淡路大震災追悼集会 ・ 3.11追悼集会

阪神・淡路大震災で児童が亡くなり、地域にも大きな被害があった。震災の様々な教訓をいかし、未来へとつなぐための機会としている。1 月の追悼集会では、地域、保護者も一緒に参加して行った。

3 月には東日本大震災の追悼集会を行い、命の大切さや自分たちにできることについて考えた。

成果と課題

震災から30年という節目を迎え、改めて防災について考える機会となった。本校では、新たに何かをするということではなく、これまで培ってきた地域との繋がり、地域とともに育んできた防災学習の財産をしっかりと引き継いでいくこと、そして地域とともに語り継いでいくことを確認した。いつ起こるのか予測不可能な災害が発生した時に、地域の一員として、自分事として、何ができるのかを考えられる児童を育成していく活動を行うことができた。

一方で、想定される災害状況が多岐に渡ることもあり、それらに対応する訓練の方法や時期などを再考する必要性を感じている。これからも児童が自分の命を守るために、そして地域の一員としてできることを学ぶことができる防災教育を行っていきたい。

未来へ「つなぐ」防災学習
～自分事としてとらえる～

1　歴史を「つなぐ」

震災当時の被災状況などについて記された記録集を活用し、震災を経験したり友人を失ったりした子供たちが当時どのようなことを感じていたのかを考える学習を行った。

1月17日の震災集会では、震災当時に本校6年生の担任であった先生から、当時の子供たちの活動などを聞くことができた。「自分の学校」の震災当時の様子を見聞きすることで、より震災を「自分事」としてとらえ、被災したときには助け合い、支え合うことが大切だということを感じることができた。

震災集会での当時の先生の講話

当時全国から届いた
応援メッセージ

2　地域と「つなぐ」

◇「防災福祉コミュニティ合同訓練」（全校児童）

水消火器体験

バケツリレー

◇「地域の防災設備を調べよう」（4年）

消防団の方と一緒に

応急給水体験

◇「ジュニア防災学習」（5年）

心肺蘇生法体験

毛布担架体験

3　被災地と「つなぐ」

4年生は、広島県の呉市立呉中央小学校と、防災学習で学んだことをオンラインで交流する学習発表会を行った。

阪神・淡路大震災の被害や防災福祉コミュニティなど、若宮小学校地域での取組を高い目的意識をもって調べることができた。また、呉市の児童より平成 30 年に受けた豪雨災害での被害やその後の取組についても学ぶことで、それぞれの地域での学びを共有し、新たな学びを得るとともに、自分たちの学びも深めることができた。

オンラインで発表

呉中央小学校の発表画面

興味深く視聴する児童

4　学習を「つなぐ」

◇職員研修「防災学習研修」

防災学習単元を考える

読み物教材の開発

◇防災ゲーム教材の活用

クロスロード

BOSAI カード X（クロス）

◇校外学習

北淡震災記念公園
（６年）

人と防災未来センター
（５年）

井吹西小学校　実践事例

教育目標【ひびく心　かがやく瞳　切り拓く力】

今年度は「切り拓く力」に着目、しなやかに粘り強く取り組む子を育めるように、日々の学習を行っている。防災についても、いつ起こってもおかしくない南海トラフ巨大地震に備えるため、実践的な避難訓練に取り組む。震災の記憶を風化させず、一人一人の防災意識を高めるなど、未来を生きていくためにしなやかに対応する力を育むことを意識して、震災・防災学習に取り組んだ。

主な防災・震災学習

〇1年…「こんなとき どうする?」
〇2年…「防災カルタ」
〇3年…「もし地震がおきたら」
〇4年…「自然災害にそなえる人々と私たち」
〇5年…「1.17は忘れない」
〇6年…「防災ポーチづくり」「福島学生との討論」

自分ごとになるように、過去を知るだけではなく、
自分の命を守るために何ができるかを一人一人が考える。

1年生

4年生

6年生

避難訓練

〇火災よりも地震の方が起こる可能性大⇒地震の訓練を増やす
〇いつ・どこでも自分の命を守る行動をとれるようにするために、
　授業中・特別教室・休み時間・予告なしなど、様々な状況で実施
〇昨年度から階段の移動時は手すりを使うよう全体で共通

手すり使って余震に警戒

廊下は窓から離る

震災祈念の集い

震災から30年を迎えた1/17、記憶を風化させないように、学校長から当時のお話を聞いた。
「1.17希望の灯り」
碑文を朗読
「しあわせはこべるように」を、
地域・保護者と共に歌った。

防災学習発表

震災学習等で学んだことを、パワーポイントにまとめ発表した。
今年は、毎年6年生が音楽会で歌い継いできた「ふるさと」を全校生で歌った。経験していない子達が、「共事者」として、当時の方々を思う機会になった。

しなやかに対応する力

職員研修

避難所開設訓練を実施
イメージはできてないけど…とりあえずやってみよう!

〇安全確認する時に校舎図に直接書き込みたい。
〇受付の向きはこっちの方がスムーズではないか。
〇救護が奥だと行きづらく、本部とも連携できない。
⇒実際にやりながら改善点が見え、研修中に変更する場面もあった。
〇やってみることで全体のイメージがつかめた。

⇓今回の研修を受けて、避難開設場所を改善

体育館の図と付箋を元に、
レイアウトを試行錯誤…

⇑できあがったレイアウト

地域との連携

防災福祉コミュニティによる作成
おたすけガイドとおたすけマップ ☞
両面カラーでくわしく
情報が載っている。

4年生の校外学習
地域の災害用備蓄倉庫を見学した。
水消火器の体験も

夏休み中のお祭りも
地域の大事なつながり

災害時、真っ先に駆け付けられるのは地域の方
防災福祉コミュニティの方に、学校の通用門や体育館の開け方を伝達した。また、今年度本校に設置された「ふっＱ水栓」についても、一緒に使い方を試し、実際に水が出る様子を確認した。

混声三部合唱曲「ともしび」の制作～共助と合唱～

１．実践のねらい

災害が起こった際の大切な考え方として「自助・共助」という言葉がある。特に「共に助け合う」という「共助」の精神は、災害時だけでなく日常の学校生活でも必要な考え方である。

その共に助け合うという考え方が、違うパート同士、互いの声を聴きながら、支え合い、一つの歌を歌いあげる合唱に通じるものがあると感じ、合唱曲の制作というプロジェクトを立ち上げるに至った。また背創作活動を通して、震災を自分事化し、震災を見つめ、教訓を生かし、未来に繋いでいくというねらいも込めた。

２．実践の内容とその成果～混声三部合唱曲「ともしび」完成への道のり～

【１】防災士・シンガーソングライター　石田裕之氏による講演

合唱曲の作曲を担当する石田裕之氏に、被災地でのボランティア活動、歌による支援などについてご講演いただいた。

【２】第２学年全員による作詞活動

震災、防災への想いを、「五七五七七」の短歌調で表現

【３】実行委員による作詞活動

学年全員から集めた言葉を、歌詞にしていく作業。

１番テーマ：見つめる　２番テーマ：いかす　３番テーマ：つなぐ

〈主題として込めた想い〉

「かけがえのない学校生活を守りたい。当たり前の毎日を大切にしたい。」

「震災を知らない世代が、震災の経験や教訓を受け継いでいくことを誓いたい」

【４】石田氏を交えた推敲作業

上辺だけの言葉が並ぶ歌詞に対して「まだまだ中学生としての本音が語られていない」とのアドバイスをいただき、もっと深くテーマについて考えることとなった。

【５】「ともしび」歌詞の完成

石田氏を交えて再度話し合いの場を持った。明らかに１回目とは違い、中学生の本音、経験してないからこその想い、経験していないけど伝えていかなくてはならない難しさ、そのようなものが表現されていた。本音を打ち明け、話し合いを重ねた結果、「ともしび」の歌詞が完成した。

１．どれほど悲しみを越えて　どれほど想い込めて
このやわらかいともしびは　僕を照らすのだろう
あの日ここで何があったのか　すべてはわからなくても
手のひらから（ぬくもりから）　今たしかに（かすかに）
感じる誰かの願い
今日の日を大切にしよう　一度きりのこの瞬間（とき）を
何気ないことのしあわせ　輝く青春の日々
希望のともしびをみつめよう
いつも　心に　ともしびを

２．ともしびもらった私に　いま何ができるかな
笑顔の花をたいせつに　守り抜くことだろう
私もできるはず　今はささやかでも
自分を信じ続けたなら
かならず　少しずつ少しずつ　明日への扉が開く
今日を精一杯生きよう　ありがとうをこの胸に
守りたいもの増えていく　輝く青春の日々
希望のともしびをいかそう
いつも　心に　ともしびを

３．風が吹いても　雨が降っても　ゆらめきながらでも
つないできた　このともしび消さぬように
今度は僕たちの番だ　私たちの番なんだ
託してくれた人たちに　頑張る姿見ていてほしい
今度は僕たちの番だ　私たちの番なんだ
この手のひらで届けよう　輝く遥か未来へ
希望のともしびをつなごう
いつも　心に　ともしびを
いつも（いつも）　心に（心に）　ともしびを

【６】学年合唱「ともしび」の披露と成果について

学年での合唱練習当初は、まだまだ気持ちの入らない生徒も多かったが、歌っていく中で「自分たちの歌なんだ」という自覚が芽生え始め、歌声にも熱が入ってきた。１月 15 日（水）に全校避難訓練を実施し、そこで合唱の披露。「自分たちが作り上げた歌が人々を感動させた」という事実に達成感を得た生徒も多く、この取り組みを通して防災を自分事として捉えることができた。

１月 15 日
全校へ披露
学年全員合唱

１月 19 日
「神戸防災のつどい 2025」で披露
（合唱部）

震災30年の想いを繋ぐ　～防災・減災を考えて行動する～

神戸市立駒ヶ林中学校

１．実践のねらい

◇駒ヶ林の歴史

本校は、30年前の阪神淡路大震災の際、甚大な被害のあった地域である。校区内の家屋や商店街は地震で全壊したり、地震で発生した火災によって焼失したりしている。現在は、当時の中学生が保護者や地域住民となって駒ヶ林中学校区で生活をしている。地域には震災当時の面影を残す場所や記録が残されている。震災から30年の節目となる今年度、震災のことを忘れず、防災・減災について考え、行動できる人間への成長を目指して防災学習・震災学習に取り組んだ。

◇震災を風化させず想いを繋ぐ

１年生は「長田の語り部になる」というテーマを掲げ、震災学習に取り組んできた。30年前、地域の方々か体験した震災について生の声を聞き、震災後、防災・減災のためにどのような活動を続けてこられたのかをインタビューさせていただいた。学んだことをプレゼンテーションソフトにまとめ、発表をすることで地域に対する理解を深め、地域の一員としての自覚の醸成に努めた。

２年生は市民救命士講習を受講し、万が一の事態が起きた際、自分の命だけでなく周りの人の命を助けるための知識と技術を学んだ。学校全体の取り組みとして「震災祈念モニュメントづくり」を実施した。震災の教訓を忘れずに、再度起こらないよう祈念するとともに、未来に伝える言葉を一人ひとり考えた。

以上のような活動を通して、地域に根ざした学校として、今後数十年の間に高確率で発生すると予測されている南海トラフ地震に向けて、防災意識を高め、行動力や判断力を身に付けさせるとともに、各家庭・地域へと防災意識を伝えていくことができるように、地域や関係団体とともに防災教育に継続的に取り組んでいく。

２．実践の内容

【１】第１回　避難訓練（４月１７日）：全学年

駒ヶ林中学校防災マニュアルに則って火災を想定した避難訓練を行う。

【２】第２回　避難訓練（垂直避難）（５月２４日）：全学年

駒ヶ林中学校防災マニュアルに則って川の氾濫を想定した垂直避難訓練を行う。

【３】「震災祈念モニュメントづくり」（２学期～）：全学年

命の大切さや防災・減災について学び、未来に伝える言葉を考え、全校生で１つのモニュメントを制作した。（一人１つ、スチレンボードで作品を作り、全員分を組み合わせる）

【４】市民救命士講習（１０月２５日）：第２学年

常盤大学の市民救命士コーディネーターを招き、普通市民救命士講習を実施し、参加者全員講習修了書を取得する。

【５】震災学習【長田の語り部になる】（１０月２８日、２９日、１１月１２日、１月１７日）：第１学年

震災を経験した地域の方々にインタビュー、地域に残る震災遺構めぐり。

家族や親せき、身近な人が経験した「災害」についてインタビュー。プレゼンテーションソフトでまとめ発表。

【６】１．１７希望の灯りろうそく作り及び震災講話（１２月１７日）：第１学年

震災の日にろうそくを立て鎮魂する意味について震災被災者の方から講話を聴き、１月１７日新長田駅前で開催される「１．１７希望の灯り」に使用されるろうそく約1,300本を作成した。

【７】第３回　避難訓練（含；シェイクアウト訓練）及び防災講話（１月１７日）：全学年

津波を想定した避難訓練を実施した。訓練後は地域の方の講話を聞き、震災当時の駒ヶ林の地域のことについて学んだ。また今年度は、コロナ禍で実施が見送られていたPTA・地域の方による豚汁の炊き出しが５年ぶりに実施された。

【８】１．１７希望の灯りろうそく並べ（１月１７日）：第１学年

新長田駅前で開催される「１．１７希望の灯り」に使用されるろうそく約1,300本を並べ、実行委員の方とふれあい、お話を聞いた。

【９】震災30周年祈念行事「元気アップ長田」（１月１７日）：長田高校、長田区６中学校吹奏楽部及び地域住民

本校体育館で指揮者 佐渡　裕氏を招き演奏会を実施した。また、五木ひろし氏によるミニコンサートや高石ともやさん追悼行事を行った。

３．実践の成果と課題

震災を経験していない生徒にとっては、自然災害の恐ろしさについての知識と理解が乏しい。リアルタイムで東日本大震災を報道で知ったり、阪神淡路大震災を経験したりしているかでも感覚は異なると考える。教員の中でも阪神淡路大震災当時に教員として働いていた世代、子どもだった世代、まだ生まれていない世代が混在している。数年後には震災当時教員をしていた世代もいなくなる。我々教員が震災の教訓を繋ぎ、継承していく必要がある。その上で生徒へ命の大切さ、震災の教訓を繋ぎ、今後起こりうる災害にも負けない力を身につけさせたい。

防災オリジナルソング・ダンス

「ダンス DE 防災」

実践のねらい

〇「防災×歌×ダンス」をテーマに、防災学習を「怖い」と感じている子どもを中心に、幅広い年齢層の方々が、楽しく防災・減災に携わるきっかけを作る。

〇防災・減災に対する意識を高め、次の世代への発信方法を主体的・能動的に考え、実際に発信する。

〇様々な外部人材と連携し、多様な視点と共助の精神を育む。

【協働企業・外部講師等】
- （株）おどらぼ　・NPO 法人プラスアーツ
- 防災シンガーソングライター 石田裕之氏
- 関西国際大学 河田慈人氏　・本校元教諭 住田佳奈美氏

実践の内容

【５月】プロジェクト発表・説明

【６月】サビの歌詞作り

【７～８月】サビ歌詞完成、ダンス先行レッスン

【９月】様々な講演会、AB メロ歌詞作り　等

【１０月】振りつけ創作、歌の収録　等

【１１月】映像作品の撮影

【１２月】完成試写会、園児への特別レッスン

【１月】諸行事への参加

実践の成果と課題　　〇：成果　　●：課題

〇生徒が主体的・能動的に防災や減災について考え、知識を深めることができた。

〇学んだ知識をどのようにして次の世代に繋げていくのかを考えることができた。

〇小さい子どもからお年寄りまで、幅広い年齢層の方々に向けて発信し、「繋げる」体験ができた。

【実践の発信について】
- NHK、MBS、サンテレビでの露出
- 三宮センター街 大型スクリーン 掲出
- 1.17 震災復興祈念イベント～つなぐ～ 出演
- 神戸防災のつどい 2025 出演
- 須磨保育所、平田幼稚園への出前授業・レッスン
- いたやど保育園を招いての特別レッスン
- 丸山中学校西野分校 文化祭 出演

●今年度制作した作品を、学校の諸活動と並行して、今後どのように後輩に繋げ、発展させていくか。

●震災で被害に会ったり、復興に尽力してくださった方々の思いを知り、それらを大切にしながら、いかに新しい発信方法を考えていくのか。

令和６年度　新たな神戸の防災教育推進事業　　神戸市立舞子中学校

過去・現在・未来をつなぐ防災教育（２）

テーマについて

本校２年生（58 回生）が生まれた年度は 2010 年度である。この年は東日本大震災が発生し、地震による被害のみならず津波による被害も甚大であった。また神戸に住む我々にとって 1995 年１月 17 日に阪神・淡路大震災は決して忘れることができないし、忘れてはいけない出来事である。

防災学習のテーマを「過去・現在・未来をつなぐ防災学習」と設定し、阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震という「過去」の災害に学び、今も多くの方が被災状況にある能登半島地震の状況に対し、多くの情報を収集・分析・検討し「現在」を知る。そして、「未来」に高い確率で起こるであろう南海トラフ、東南海トラフ地震に対しての準備や発災時、発災後の対応を見据えたテーマとした。

ねらい

①阪神・淡路大震災や東日本大震災等（過去）から学び、教訓を得る。
②「知っている」「〇〇ができる」という知識・技能を身につけて、有事の際に行動の一歩目を生み出す勇気を持った人材の育成。
③「未来」に高い確率で起こるであろう南海トラフ地震等に対しての準備や発災時、発災後の備えを考える。

過　去

教科等横断

・阪神・淡路大震災のデータより災害弱者について学び、災害時に立場が弱くなってしまう人々があらわれることを知る。東日本大震災後の石巻日赤病院のトリアージについて学び、弱者におちいってしまう人々の立場になって考えられる資質の向上を目指した。

ゲストティーチャー講話

・過去の災害時の避難所運営の経験談やそれぞれに対しての反省についてお話をいただいた。実際に見聞きした、生の声を聴き考えることができた。

現　在

牟岐町立牟岐中学校（徳島県）と交流

・野外活動を介して、以前よりリモートで交流していた牟岐中学校へ訪問。
　お互いに防災学習についての発表を行い、成果を相互に交換した。
・実際に面会し、生徒同士の交流を図り、有事の際に助け合える関係づくり。
・徳島県内の訪問した地域全体で、防災に関しての準備・備えについて、現状を見て学習。学校や施設、体験活動のインストラクターもあいさつの後に、必ず避難経路と避難の仕方、誘導は誰が行うかを必ず連絡をしていた。

未　来

避難所運営シミュレーション

・災害が起こった想定をし、避難所に来るだろう困り感を持った人たちを予想。
　どんな手立てができるか、それぞれに寄り添った考え方ができるように練習。
　人権学習の概念も織り交ぜながら学習。
・避難所運営ゲームの実施。

神戸学院大学との連携（校外学習）

・防災サークル（シーガルレスキュー・防災女子）による実習・講習
　①ロープ結索実習　②非常食講話（ローリングストック法）　③心肺蘇生法実習

**いざと言うとき
地域で人を
助けられる人材へ**

学習成果と今後の課題

〇徳島県牟岐中学校の交流、徳島県太平洋岸地域での野外活動では、南海トラフの被害が大きいと予想されている地域の防災に対しての意識の高さや違いを感じさせられた。訪れるそれぞれの場所（役所・企業・学校・施設）で、諸注意の中に「地震が起きたら…」という説明が必ずされていた。大人だけでなく、避難が必要な場合は、生徒が誘導係に当たるなど、老若男女かかわらず誰に聞いても有事の想定をもとに、行動できる準備がなされていた。震災を経験した我々よりも高い意識で防災・備えをしている地域での意識の高さを痛感した。

〇避難所運営のシミュレーションをもとに行った学習では、想定しなければならない注意点はもとより、避難が予想される人々の一人ひとりに対して思いをめぐらせなければならないという、人権学習の概念を含めた学習をできたことが成果としてあげられる。

令和6年度　新たな神戸の防災教育推進事業

神戸市立科学技術高等学校

確かな防災知識を持った「工業高校生防災士」の育成

～阪神・淡路大震災の教訓から学ぶ工業高校における防災教育への取組～

都市防災のねらい

（1）阪神・淡路大震災の教訓を活かした「確かな防災知識」の習得
（2）工業の専門知識と確かな防災力、高い倫理感を身に付けた防災リーダーの育成
（3）「防災士の取得」によるキャリア形成
（4）専門家の特別講義による幅広い防災知識の習得
（5）工業専門学科の「見方や考え方」を教科等横断的に接続し、複雑に変化する社会や、あらゆる生活の場面で直面する様々な課題に、主体的かつ協働的に取り組む姿勢と力を伸ばし、地域の防災リーダーとして活躍できる人材育成

救える命を救うための“確かな知識と技術”の習得

FAST（民間救急講習団体）による市民救命士講習と救急法、本校の養護教諭による応急法の実技講習を実施し、非常時に命を救う技術を身に付けて「自助・共助できる力」を高めました。

〈市民救命士講習〉

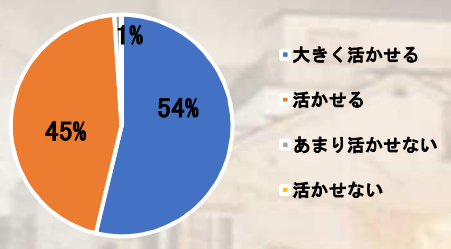
〈救急法・応急法講習〉

まちを知る、被害を知る、対策・対応を知る

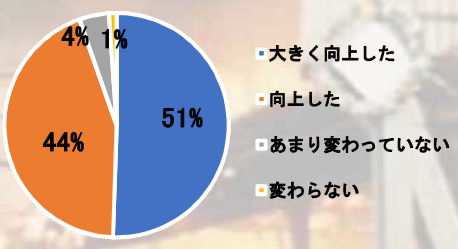
●災害図上訓練【DIG】（災害時発生時における対応策をシミュレーションする訓練）
「まちを知る」、「被害を知る」、「対策・対応を知る」取組を通じ、災害時に役立つスキルを身に付けました。

授業アンケート結果

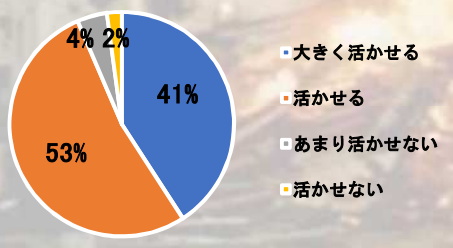
●都市防災での学びを家庭の防災力向上に活かせるか



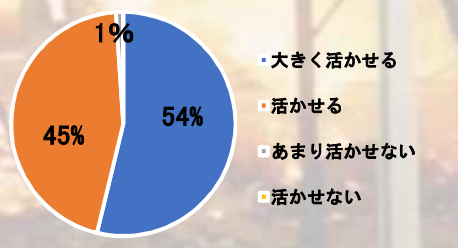
●自分自身の防災力の変化



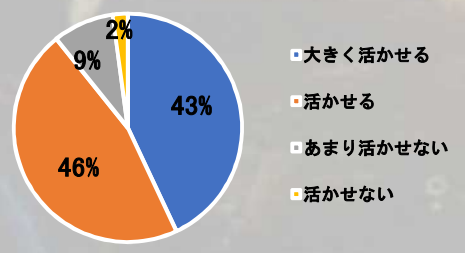
●都市防災での学びを地域の防災力向上に活かせるか



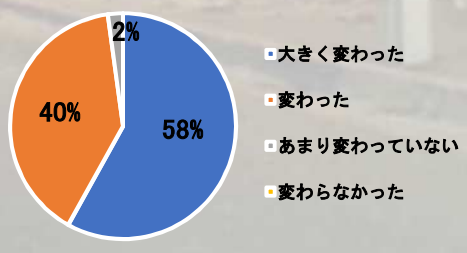
●都市防災での学びを家庭の防災力向上に活かせるか



●都市防災での学びを進路先の防災力向上に活かせるか



●授業による防災に対する意識の変化



n=93（令和７年１月９日実施）

専門家による防災特別講義

兵庫県警災害対策課、国土交通省、神戸市建設局、神戸地方気象台、神戸住環境整備公社など、専門家の知見から幅広い知識の習得を目指しています。

〈神戸地方気象台〉

〈兵庫県警災害対策課〉

〈国土交通省〉

〈神戸住環境整備公社〉

震災特別講演

久元　喜造　神戸市長による震災特別講演を開催し、阪神・淡路大震災当時の様子や神戸のまちが復興する過程、神戸市が実践している防災対策について具体的事例を挙げてご講演いただきました。

実践の成果と課題

例年、防災を学ぶ意欲をもち授業を選択した生徒でも、4月当初は身近な場所で災害が発生し、自分自身が被災する可能性があるというイメージを持つことができない。しかし、授業や特別講義、演習を通じて災害を身近なものとして捉えることで、災害や防災に対する意識が向上し、学習成果を地域で活かしたいという生徒が増加した。また、今年度は56名（令和7年1月20日現在）の高校生防災士が誕生した(延べ336名)。資格取得をゴールとするのではなく、授業を通して培った知識・技術を防災士として家庭や地域社会で活かさなくては意味がない。今後、授業で培った知識・技術を工業高校で学んだ生徒として様々な場所での活躍を期待したい。

今年度のアンケート結果からも分かるように、取組を通じ、生徒の防災意識は大きく向上している。反面、自分たちの知識を活かすことに対して不安を持つ生徒がいることも確かである。

今後は、工業高校生防災士が活躍できる場を、地域や幼・小・中へと広げる活動を模索していきたい。それらにより、防災士としての自覚を確かなものにできると考える。
工業の専門知識を持った高校生防災士が活動する姿は、幼・小・中の子供たちにとって目指すべき高校生像の一つとして映り、地域や企業にとっては明日の担い手として期待される人材とされることを期待する。これらの活動を通じて、様々な場所から防災や減災の輪が広がり、さらには神戸のまちの防災力向上を目指し、科学技術高校は今後も工業高校生防災士の育成に取り組んでいきたい。

令和6年度 新たな神戸の防災教育推進事業

神戸市立いぶき明生支援学校

生徒の実態・段階に合った 防災学習

(1) 実践のねらい;

特別支援学校学習指導要領を基に観点表と単元案を作成し、実態に応じた授業を行うことで、知識や避難行動の定着を図る。

(2) 実践例;知的中学部１年生の取り組み

①【災害発生】地震発生時の身の守り方

（毎回授業の開始に行う。）

毎回の授業初めに教室でサイレンを流し、避難体勢を取った。大型モニターにポイントを視覚的に示し、伝えた。また、回数を重ねるごとに、サイレンの音だけで体勢をとれるようになった。

②【避難行動】防災カッパをつくろう

～雨だけじゃないカッパの使い方～

防災カッパはなぜ必要なのかを考えた後、実際に、ごみ袋で防災カッパを作った。グループの実態によっては、防災カッパを作る作業を省き、実際に着用して、外に行き体験的に活動した。

③【避難行動】段ボールスリッパをつくろう

～スリッパは何を守るの？～

地震発生時、ガラスやがれきが地面に落ちている可能性があることを説明した後、足つぼマットを使い疑似的体験をした。スリッパの有・無ではどのような違いがあるのかを考えた。その後、段ボールスリッパを作った。

④【避難所生活】 避難所生活を体験しよう

▲段ボールベッド

▲バケツの水で手を洗う

▲非常食体験

▲タオルで身体を拭く

実際に災害が起きたら想定される活動を取り上げ、体験的に取り組んだ。

(3)実践の成果と課題

・生徒の発達段階に応じたグループ編成をして単元を考えた。→生徒の実態に応じた授業を考えやすくなった。

【成果】

・生徒が自分から身を守る方法を考えられる場面が多くなった。

・身を守る学習を繰り返すことで、心理的に不安になる生徒が落ち着いて活動することができた。

・教職員と避難していた生徒が、見通しをもつことで友達とも避難できた。

⇒着実に知識・技能は向上した。

【課題】

・小学部6年間、中・高等部では3年間を見通して、防災学習の積み上げができるように計画していく必要がある。

→生徒はどこまでの力が身についているのかを可視化できるようにしたい。